

本年度共通課題についての討論

本年度大会の課題については、「広く農民の共同（協業）組織を取扱う」か、「農民組織と村落」をとり上げるかの二方向が考えられてきたが、四月十九日の拡大委員会、五月十七日の課題研究会の二回にわたつて討論、研究された結果、およそ次の点にほられた。

仮題としては「農政と農民の組織化」資本主義の形成と発展における農民の対応としてを考へてみる。内容的にみれば、資本主義の前夜をふくめて、資本主義の形成・発展の歴史的段階に於いた農民の対応としての農民組織を問題とするが、このためには「歴史的段階に於いた分析」といわゆる「組織論」的な分析の二方向が考へられる。しかし、その両者を切り離して使用すべきではなく、前者を土台としたから、具體的な突込み方として、リーダーシップ、役割、機能、象徴過程などの組織の諸側面をとらえてゆくことが望ましい。

右のような点に討論がしほられてきた経過

を詳細に報じている余裕がないのが残念であるが、今後この課題を追求する上で必要となる限りで問題点を語ることにする。

四月十九日の会合で、中心的に提起されたのは小池基之会員であつたが、氏は、「農政と農民組織という点にほつたら如何か」と発言されとくに「政策（広いいえば体制）に対する農民の対応の形態として農民組織を考へるとよい」とつけ加えられた。この提案をめぐつて、「農民組織とはなにか」、「どの範囲まで農民組織の範疇に入るのか」、「組織というからには、村落とは異つた性格や原理が考へられるのではないか」などの問が發せられ、これらについて、もう一度研究会をもつ必要があるということになつた。

五月十七日は課題研究会を在京会員で開き前回の小池提案をより一層検討した。その結果、(1)農政と農民という場合、とくに一定の農業の危機に对应して出てくるものとしてとらえることが望ましく、その点からすれば、基本的には、資本主義での問題と考へてよい(2)ただし歴史学の分野の参加を得るためにも資本主義前夜の情勢にまで拡大すべきでもある。(3)農政に対する農民の対応といつても、農政が先にあつて農民の組織が生まれるのではなく、農業の危機が農民の組織化を必然化させ、それを農政がつかんで自己の制に組み入れてゆく、さらにそれに応じて農民組織が強化される、というとらえ方をすべきである(4)組織を靜的に考へるのでなく、むしろ歴史的段階に於いて、組織化という過程でとらえ

リーダーやリーダーシップに焦点をあててゆく。(5)歴史的段階としては、たとえは、地租軽減運動をめぐつて、小作争議が農民組合運動として展開される時期に、現段階の共同化の動き等々のポイントが考へられる。(6)それらは、ある意味では、既存の村落共同体秩序と原理を異にしそれらと抵触するかぎり組織があらわれるといふ点でとらえることができる。(7)考へる組織としては、上からの組織化としての農協（農会）、下からの生産組織としての共同化集団、業種別諸組織（出荷組合など）、いわゆる反体制的組織（政治的抵抗組織・農民組合）などを挙げることができる。以上の諸点が指摘されたが、これらについては広く会員諸氏からの意見を得て確定したいということになつた。

(M)